

オオムラサキ、国蝶となる

今井 彰

1 国〇〇と名のつくもの

国蝶、ナショナル・バタフライといえ、大変格式ばった、いかめしい感じの蝶を連想してしまうが、いったい日本の国蝶としてオオムラサキが選ばれた経緯は、どんなだったのであろう。そもそも、蝶に“国蝶”すなわちその国を代表するような種類の蝶を決めるという発想は、いつ頃出たものなのだろう。

日本の国旗、国歌はそれぞれ日の丸、君が代であり、これは永らく慣習として国民に周知のものであったが、法律で決められたのは、まことに新しく、平成 11 年 8 月のことであった。それでは、他の動物や植物の中で、国〇〇とつくものはあるかという、日本の国花は桜で、国鳥は雉子(きじ)だという。ところが雉子は昭和 22(1947)年 3 月日本鳥類学会がこれを決めたところがあるが、国花の桜については、その決定に至る記録はどこを見てもないのである。桜についての沢山の文献を調べたが、これがわからない。国花・国花…と永い間言い伝えられてきたこの花が、実は決まった手続を踏んで判定されたものではないといったら、多くの人は不思議に思うであろう。それどころか、ある文献では、日本の国花は菊と書いてあるものもあるのである。

2 選んだのは任意団体

そこで、国蝶のオオムラサキであるが、これは日本昆虫学会(協会ではない)が、昭和 32(1957)年 10 月 5 日の第 17 回総会の席上選定したもので、その点ははっきりした制定過程を経て決まったものである。

ただし、問題はなぜオオムラサキが選ばれたのかということであり、ごく常識的に考えてみても、対抗馬ならぬ対抗“蝶”として、本州特産のギフチョウや、優雅な飛翔のアサギマダラなどが、候補にあがっただろうと思われるのに、どうしてそれらの中からオオムラサキに選ばれたのかという疑問が残るのである。

では、オオムラサキが国蝶に選ばれた経緯について、以下に記してみよう。

そもそも、この話が出たのはかなり古く、昭和 8(1933)年にさかのぼる。当時、蝶類同好会という団体(会員数約 400 名)があり、その創立者の一人である江崎悌三教授が、国蝶選定の提案をしたことから始まった。これが昭和 8 年 4 月 12 日のことであったという。この時、江崎教授と中原和郎博士が推薦したのがオオムラサキであり、出席会員の多くはこの案に賛成であったが、山階芳麿氏(当時侯爵)からは、ミカドアゲハがよいという意見が出された。また、第三の候補にはギフチョウがあがったともいう。(坂本与市『森の昆虫記』)

ちなみに、オオムラサキの賛成票は 23 通で、その名前を列挙すれば次の通りである。少々くどくなるが、当時の昆虫同好者の世界を知るためにも、あらためて記録しておく意義があると思う。

河野光子、戸沢信義、中原和郎、朝比奈正二郎、
朝比奈正三、滝巖、高島春雄、内田清之助、広江寅三、
谷村輝雄、田中竜三、小林秀太郎、藤門省平、杉谷岩彦、
細野淳、井崎市左衛門、角田寛英、広瀬高三、菊田祐徳、
井上寛、久崎光生、佐藤弘一、山田舜亮、柴谷篤弘。

(24 名なのは、朝比奈正二郎・正三を一票と数えたかと思われる。江崎教授自身は提唱者だから入っていない。)

さて、このように大勢はオオムラサキであったが、会をリードしていた江崎教授は、この時には結論を出さず、さらに他の候補を推薦してほしい旨、会員に意思を問うたのである。



ギフチョウ
Luehdorfia japonica



アサギマダラ
Parantica sita nipponica



ミカドアゲハ
Graphium doson

3 反対論者の主張

オオムラサキ国蝶の案に対し、反対論を掲げたのは、会員の結城次郎氏であった。昭和10(1935)年1～2月号のZEPHYRUS誌上で、結城氏はアゲハ(ナミアゲハ)を推薦し、その理由として、

- ① 個体数が多く、容易に観ることができる。
- ② 名・形が知れ渡り、教科書にも載っている。
- ③ 形・色・飛び方すべての点で日本的な感じ。

(オオムラサキの飛び方は迷走的で狡猾な感じ)

をあげたところ、この普通種(平凡種といってもいい)という点に意外や賛同者が多く出て、^{あなた}侮りがたい勢力になってきた。その理由の一つには、昔から平家の家紋に使われてきた歴史的存在まで持ち出されたというから、この論争は両陣営がそれぞれ長所を主張し、短所をあげつらうという、果てしなく続きそうな様子を呈してきた。

アゲハ論に対するオオムラサキ派の論点は、

- ① アゲハは柑橘類の害虫である。
- ② 外国のパピリオ属に比べて平凡である。
- ③ オオムラサキの飛び方を批判するには当たらない。

として、小学校国定教科書に、アゲハはともかく、オオムラサキもちゃんと載っている(昭和12年7月改訂の教科書巻10・5年生用)という事実を援用したりして、アゲハ論に反対した。

この間の両陣営の論争は、昭和11(1936)年～12(1937)年まで続き、地方の同好会(例・広島昆虫同好会、アゲハ賛成論)からの意見までがZEPHYRUS誌上を賑わしたが、ついに蝶類同好会は昭和11(1936)年9月30日を締め切りとする会員の全員投票(記名式)を行うことになった。この結果は、ZEPHYRUSの昭和12(1937)年1月号に発表された。

投票総数112、オオムラサキ75、アゲハ34、アサギマダラ1、ギフチョウ1、アカボシウスバシロチョウ1(当時朝鮮は日本領土)。

以上の結果がでたが、会員総数が399名で投票総数が過半数に達しなかったため、江崎教授はここで決定することはせず、機が熟するまで待ちたいとして、この件は保留となったのである。

その後、ZEPHYRUS誌上では、柴谷篤弘氏、野平安芸雄氏が、この問題について所見を発表し、いずれもアゲハ論批判、オオムラサキ肯定論であった。また野平氏は、投票結果がオオムラサキ多数であっても、これを保留とした江崎教授の態度をよしとして高く評価している。

4 決定されるのは戦後

昭和11～12年といえば、日本は対中戦争に突入し、既に国全体は戦時体制に入っていて、蝶類同好会の活動も急激に低下し、もはや国蝶論争どころではない状況であったと思われる。まさにそれから20年の月日が流れてしまうのである。

昭和32(1957)年3月30日に、東京で日本昆虫学会の評議員会が開催された。日本昆虫学会はこの時、創立40周年を迎えていた。先に述べた江崎教授をはじめとする蝶類同好会(戦後復活せず?)のメンバーが、多数この会に入会していたものと思われる。この時に評議員だった高島春雄氏は、既に戦前の国蝶選定の経緯をよく知っていて、なんとかオオムラサキをと考えていた。冒頭に述べた雉子の国鳥選定が、この時から10年前(1947)に行われたこともあって、高島氏は、やはり然るべき団体でこれを正式に決める必要があるとし、この機会を逸してはいつ実現するかわからないと判断して、評議員会に議案を提出して趣旨説明を行ったところ、案外簡単に承認されたのである。



アゲハ
Papilio xuthus

世界各国の蝶切手の中で
意外にもナミアゲハは韓国
に1種類あるだけである。

そして、話が前後するが、この承認に先立つ前年(昭和31 - 1956年)に郵政省はオオムラサキを描いた75円の切手を発行した。この時の解説に、国蝶オオムラサキという表題があつて、あたかもその時点には国蝶に制定されているような感があつたが、まだはっきり決まっていたわけではなかった。ただ、このような動きがあつたことで、江崎教授は既に国蝶として一般の人にも認められているならば、わざわざ特定の機関できめなくてもいいではないかという意見をもっていたようである。しかし、評議員の高島春雄氏は、前述したように、それでは有効ではないと考えて、議案として提出することになったのである。

切手の件だけをみれば、オオムラサキ切手の発行が、昆虫学会の制定を早めたきっかけになったともいえようが、郵政省は、切手発行時にはまだオオムラサキが国蝶に正式にはなっていなかったことを知らなかったわけであるから、これは制作者が国蝶の根拠を十分調べないでデザインにとりかかったものであろう。

という経過をたどってみると、国蝶制定はいわば一般の人たち(この場合は昆虫愛好家)からの声によってなされたもので、民間団体が主体で決めたものである。いわば下からの運動が盛り上がった結果であつて、上からの押し付けではない。たとえその時点で、国民全体の声を反映していないといつても、その道の専門家が良識を持って選んだものが、しだいに市民権を得て全般に広がっていき承認されたという、いわば民主主義の一典型ともいえる形態をとってきたのではなからうか。昆虫学会といつても大半はアマチュアの集まりであり、この学会の清濁併せ呑む大らかな性格を表わして、大変よいことと考えるのである。

(蝶の民俗館館長)



オオムラサキ
Sasakia charonda



— 手塚治虫先生を偲んで — 手塚先生デザインの会のシンボルマーク

当時の発足準備委員会で「守る会」のシンボルマークは、引き受けていただけるかどうかは別問題として、昆虫に造詣が深く、また命の尊さを作品を通して訴えておられる手塚治虫さんをお願いしようということになった。

趣意書を持ってお願いにいった代表の高橋さんから、「引き受けてくれるようです。」と聞かされ大いに喜んだものの、「できました。」という連絡はいつこうに入らなかった。考えてみると、「引き受けてくれるようです。」の「ようです。」は実にあいまいで不安である。高橋さんもそのあたりが心配だったらしく「一度訪ねてくれ。」という。忙しい手塚さんへボランティアをお願いしているシンボルマークの催促は決して気の進む役ではないが、我々の熱意を理解していただくしか方法がない。

事務の人は、「先生に一度お話ししてありますが、もう一度話しておきます。」といってくれた。その結果を聞きにまた出かける。「先生はご承知と思いますが、まだできておりません。」と、三度目も五度目の訪問の折も同じ答えが返って

きた。訪問の回が重なるたび、逆に日の間隔がせばまっていく。「まだできていないんです。すみません。」「いえ、私たちの方こそ忙しい先生にご無理なお願いをしているのですから…でも発足会まであまり時間がありません…先生によるしくお伝えください。」といったものの、私は手塚さんにとっても悪いことをしているような気がして、もうお願いに来るまいと思っていた。

嬉しい知らせはその三日後に来た。それを告げる事務の人の声もはずんでいたように思う。

高田馬場駅から事務所まで小走りに行き、会議中の手塚さんに直接お礼を申し上げられないことが心残りではあったが、パネルに描かれたシンボルマークをいただき事務所を出た。その時、向かいのドアから糊とハサミを持った先生がひょっこりと現れたのだ。「ありがとうございます…。」次の言葉が出ない私に、手塚さんはあの微笑をうかべて、「そのマークどうお使いになってもけっこうです。がんばってください。」そういうとすぐ別の部屋に入って行かれた。あまりに一瞬のできごとで今でも夢だったのではないかとさえ思っている。

守る会の事務所に帰りエノキの葉の中に描かれていたオオムラサキの蛹のシンボルマークを眺めていると「おおきくはばたきなさい。」という手塚さんの声援が聞こえるような気がした。

その手塚さんも今は帰らぬ人となってしまった。

手塚さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。

国蝶オオムラサキを守る会
内城 道興

(『雑木林からの便り Vol. 6-2』1989 年)

I オオムラサキ序論

1. 国蝶について

1) 国蝶に決まるまでのいきさつ

1933年（昭和8年）4月12日、東京で開催された蝶類同好会の席上で、故江崎悌三氏（昭和32年没）が国蝶なるものを決めたらどうだろうかと提案されました。このとき初めて国蝶が話題にのぼったと言われています。

この会合で、大多数の会員はオオムラサキ（*Sasakia charonda* Hewitson）を国蝶に推しましたが、一部にミカドアゲハやアゲハ支持の意見が出て、ついに決定をみないまま1年以上も論争が続けられ、1936年（昭和11年）に投票によって圧倒的多数の結果、オオムラサキが国蝶の座についたわけです。しかし、投票総数の不足から正式決定には至りませんでした。国蝶として国内はもちろん、外国にも紹介されたのはこの頃からと言われています。

1957年（昭和32年）3月、こんどは蝶類同好会とは別に日本昆虫学会の役員会で、故高島春雄氏からこのことについて発言があり、その席上で正式に国蝶に決まりました。国蝶とはいう

ものの、国鳥のキジと同じく別に法律によって規制されているわけではありませんが、それだけに格調の高い価値ある蝶ということになりましょう。

2) オオムラサキの切手

昭和32年に開かれた日本昆虫学会役員会での正式決定より一足早い昭和31年6月20日、75円の通常切手に本種が図柄となって登場することになりました。最初、高知で特別天然記念物になっているミカドアゲハが図柄の候補にのぼりましたが、故林慶氏の意見に従ってオオムラサキに落着いたということです。

この切手の原図は、林慶氏所蔵の福島県産のさの標本で、切手の地色は鮮かな赤茶色。地色の鮮かなこの切手はその後、姿を消し、1966年（昭和41年）9月1日からは同じ図柄ですが、初回のものより地色が淡く（くすんだ赤茶色）、NIPPONのローマ字入りのものが再発行されました。オオムラサキの暗れ姿を印象づけるには、地色の濃い初版の方がしっくりしていたと思われます。

こうして昭和31年から16年間の長期にわたって発行され、私たちの目を楽しませてくれた国蝶の切手も、昭和47年（1972年）



図1 オオムラサキの通常切手(上は初版、下は再版のもの)

I オオムラサキ序論

2月1日に行われた“通常郵便物の料金改正”にともなって印刷調製が中止になり、もう郵便局の窓口にも見られなくなりました。

2. オオムラサキの分類・学名など

1) 分類

門……節足動物門 (Arthropoda)

↓

綱……昆虫綱 (Insecta)

↓

目……鱗翅目 (Lepidoptera)

↓

科……タテハチョウ科 (Nymphalidae)

↓

属……*Sasakia* 属

↓

種 → オオムラサキ (*Sasakia charonda* Hewitson)

本種の分類学上の位置は上記のとおりです。節足動物とは、体が多く節からなっており（節があることによって体を折り曲げることができる）、同じく節のある足を何対かもっている動物の総称です。昆虫類は無脊椎動物（背骨のない動物）の一群で、節足動物門に所属し、昆虫綱に属す一員ですが、昆虫綱の中には鱗翅目（はねに鱗粉をもつチョウ・ガ）、膜翅目（ハチ・アリ）、双翅目（ハエ・カ・アブ）などがあり、いくつ

かの目に分けられています。オオムラサキは前足が退化し、物にとまる時は中足と後足の4本だけを使うとか、後ばねの中室が開いているなどから、タテハチョウ科に属します。蝶の場合は、タテハチョウ科・アゲハチョウ科・シジミチョウ科などを含めて9科から成っており、その下に属があって、さらに種に分けられています。種は分類の基本的なものといいていいでしょう。

ところで、昆虫類を含めた節足動物の数は一体何種あるでしょう。驚くことに約400万種と推定され、そのうちの約80%（300万種ぐらい）は昆虫類が占めていると言われています。300万種といっても名前（学名）のついているものは約70万種、あとは無名の昆虫ということになります。この地球上に生息する昆虫はいかに大きな一群であるか想像できると思います。

分類に関してごく簡単に述べましたが、さらに詳しくは野村健一著“昆虫学ガイダンス”（ニュー・サイエンス社）をご覧ください。

2) 学名

ササキ <i>Sasakia</i>	チャランダ <i>charonda</i>	ヒューイットソン Hewitson
属名	種名	命名者名

学名の用語は、現在では死語と言われているラテン語、ラテン語化した他国語、またはギリシャ語が用いられています。私たちの姓名と同じく昆虫にも姓にあたる属名と名にあたる種名とがあり、これを二名法（亜種の場合は3語よりなる）と呼